

令和元年度第3回京丹後市まちづくり委員会 会議録

- 1 開催日時：令和元年9月30日（月）午後1時30分～午後4時
- 2 開催場所：京丹後市役所 201・202会議室
- 3 出席者：○京丹後市まちづくり委員会委員
中谷真憲委員、大庭哲治委員、吉岡和信委員、川戸一生委員、
野々垣里美委員、奥野美智恵委員、吉岡高博委員、土出尉恵委員、
味田佳子委員
○京丹後市まちづくり委員会 新川達郎アドバイザー
○新井政策総括監兼市長公室長
○川口地域支援・定住対策監
○森戸理事兼弥栄市民局長
○政策企画課 谷口課長、平補佐、小林主任

4 次第

- (1) 開会
 - (2) 会長挨拶
 - (3) 会議録確認者の指名
 - (4) 審議
「京丹後市まちづくり基本条例」の検討及び見直しについて
(1) 「未来のまちづくりワークショップ」について
(2) 「持続可能な地域づくり」の取り組みについて
 - (5) その他
 - (6) 閉会 職務代理挨拶
- 5 傍聴者・報道関係者 出席者数0人

《議事経緯》

総括監： 本日は、お忙しいところ、当委員会にご出席いただきましてありがとうございます。定刻となりましたので、ただ今から令和元年度第3回京丹後市まちづくり委員会を開催させていただきます。

なお、本日の会議は公開とさせていただいておりますので、ご了解いただきますようお願い致します。

本日の委員会につきましては、小林委員、越江委員、中西委員からご欠席の連絡をいただいております。吉岡委員につきましては、遅れて来られる連絡をいただいております。

本委員会は「京丹後市まちづくり委員会条例第7条第2項」の規定によりまして、委員の過半数の出席がありますので、本日の

会議が成立していることをご報告させていただきます。

それでは、開会にあたりまして、中谷会長様からご挨拶をいただきたいと思ひます。よろしくお願ひ致します。

会 長： 皆様こんにちは。中谷です。最初だけ立ってご挨拶させていただきます。本当に、今日も9月もおしせまった中、お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

まちづくり委員会、まちづくり基本条例の検討、見直しということになっておりますが、それに絡めて、市民の目線で、まちづくりに関して色々な意見をいただくということになっております。

今日は第3回ですが、未来のまちづくりワークショップなど色々なご説明をしていただきます。それと持続可能な地域づくりのこと、新たな地域コミュニティですね、これには色々なまちづくりの課題が関わっていることと思ひます。こうしたことに関して、本当に自由な何者にもとらわれないことが一番いいかなと思ひております。どうかよろしくお願ひ致します。

総 括 監： ありがとうございます。それではここで、配布資料の確認をさせていただきます。

(配布資料の確認)

それでは条例第7条第3項の規定によりまして、会長が会議の議長となりますので、ここからは会長に議事進行をお世話になりたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

会 長： それでは次第に沿って進めさせていただきます。まず、会議録の確認者の指定をいたします。「京丹後市審議会等の会議の公開に関する条例施行規則第5条第2項」の規定により、「会議録の内容について、会長が指定した者の確認を得るもの」とされておりますので、私から指名させていただきます。たいへんお手数ですが、奥野委員様と土出委員様、お二方にお願ひしたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

それでは審議に入っていきたいと思ひます。次第4の「京丹後市まちづくり基本条例」の検討及び見直しについての説明を事務局からよろしくお願ひ致します。

事 務 局： 失礼します。

(資料1・参考資料説明)

会 長： はい。ただ今の事務局の説明の中で、ご意見ご質問があればお聞きしたいと思ひますが、いかがでしょうか。もう一度資料1か

ら目を通しながら、ご発言をいただければと思います。

皆様に考えていただいている間に、1点投げおきますが、資料1の視点1に出てきていた、議会と行政が変わったかという点ですが、その視点に関して、実際に市制が充実してきたということはよく分かったのですが、議会に関しては、何か取組みがあったのでしょうか。議会の変化という意味では。いかがでしょうか。

事務局： すいません。このまちづくり基本条例が出来た時に、議会の基本条例も策定をされております。当然議会の立場での基本条例という形になりますので、そこでもしっかりと情報発信ですとか、市民へご理解いただくための取組みもしっかりとうたわれているということでございます。それに伴って、議会報告会を、毎回定例会後に開催されているということで、進められているということでございます。

会長： 議会報告会は、これが出来たことによって、議会のほうも、発足していったということですね。

事務局： はい。取組みの進め方としては、そのように理解しております。

会長： はい。わかりました。ありがとうございます。今のように、とにかく、この点をもう少し質問させていただきたいとか、詳しく知りたいということがあれば、今出していただければと思います。いかがでしょうか。

委員： すいません。よろしいですか。資料の趣旨を確認させていただきたいのですが、この資料1は新川先生の発表といたしますか、7月にあったと思いますが、それに対する解答ということでよろしいでしょうか。資料についてで、申し訳ございません。

事務局： はい。すいません。これは新川先生にアドバイスというか視点として提示していただいた部分ということがありまして、それに対して今現在先ほど言いましたように、基本条例に基づいて、市政がしっかり運営されているのかということが一つの視点としてある中で、市としてはこんな取組み、視点に合わせてこういった取組みをしていますということで、解答というよりは、どちらかと言うと、市としてはこういった取組みをしていますという参考程度に出させてもらっている資料ですので、もっとここは足らないとか、ここはこうした方がいいよということがありましたら、言っていただいて、また提言の中に入れていただきますと、次につながっていくと思っておりますので、そういった視点でお願いできればと思っております。

委員： 趣旨理解しました。そうしましたら、この記載の中で、特に京丹後市が力を入れたことによって、変わったということがあるのであれば、それは京丹後市の積極的な取組みだと思しますので、何かアピールと言いますか、強調されてもいいのかなと思うのですが。並列に書かれて、時代の変化と共に変わりなく、受入れざる終えない取組みもあれば、あるいは京丹後市が自ら、やったという取組みも色々と交ざっているのかなと思いますが、その辺りはいかがでしょうか。

事務局： はい。ありがとうございます。確かに色々な取組みをさせていただいているのですが、一つにはしっかりと市政を市民の皆様伝えていこうという視点は当初から強くあり、ホームページ以外でも例えば審議会の市民参加ということですが、公募型ということでさせていただいたというのも、早い段階、何年くらいかという具体的な年数が今は分かりませんが、そういった取組みも始めさせていただいたということもありますし、それから特徴的な部分でいいますと、2ページになりますが、例えば予算編成時期に地区要望の聴取ということで、毎年度各集落や地区から地区要望という形で、例えば道路を直して欲しいですとか、防犯灯をつけてほしいですとか、そういった要望を全地区からお聞きしているという所でございます。だいたい多い時で年間2千から3千弱くらい要望は年間出ておまして、その中で予算化されるものは、精査されるのですが、そのように各地域から要望もいただきながら、しっかりと予算付けにも活用させていただいているというか、皆様のご意見も聞きながらさせてもらっているというような、あまりほかの地域では細かい地区要望を取ったりということはないのかなということで、それは特徴的かなと思っております。以上です。

会長： ありがとうございます。その他どうでしょうか。

対策監： すいません。先ほどの事務局から説明した京丹後市議会基本条例ですが、京丹後市まちづくり基本条例と同じ平成19年12月21日に制定して、施工が20年4月1日からということでございます。流れとすれば、まちづくり基本条例を制定するために市民の方に集まっていただいてという動きがあつて、そういった事を受けながら、議会も動かされたというそういった経過があつたと記憶しております。

会長： わかりました。ありがとうございます。どうでしょうか。大事

な視点は、この基本条例を作ってみて、何が進んで何がまだ進んでいないのか足りないのかということ、考えていくことだと思います。もちろん、ここにいる委員の皆様も、全部、詳細に基本条例を見ているわけではないですし、その後の変化、肌感的なものでもいいですし、何か感じられていることもあるかもしれないですし、この資料も見ていただいて、何が進んだのか、ご意見があればと思いますが、どうでしょうか。

これを考えていただいている間に、先に言っておきましょうか。その後、続けてご発言いただければと思います。全体にこの視点1、2、3、新川先生に作っていただいて、大事な視点だと思うのですが、これに基づいてみていく限りでは、市民からの吸い上げ、社会からの吸い上げ、これは随分整備が進んできたからかこれを見て思うのですが、その吸い上げが進んだものを、もう少しさらに先の協働まで進めていく、そこの部分のステップがまだやるべき事があるのかという風に見ていたのですが、具体的にいいますと、例えば中間支援団体みたいなものですね。そうしたものが、人口5万ちょっとの町ですし、もっと生きてきてもいいと思いますが、その辺りがまだ強化すべきポイントのような気がします、例えばこれに関して何かあれば教えていただければと思いますが、どうでしょうか。

対 策 監： はい。そうしましたら、この基本条例を元に、総合計画の策定をしてということで、市長が交代すれば、基本計画の見直しをするというような、そういった手続き的なことになっておまして、今の市長に就任後に総合計画の基本計画を見直す中で、若い方ですとか、女性の方にもご意見をいただくワークショップをもたせていただいて、そういった中で、やはり若い人がこの町に帰ってきたいと思えるような町にならないといけないのではないのかということで、おもしろい町を作っていく必要があるという意見をいただいて、そういった中で、施策としてやっていこうとしたのが、今で言う京丹後未来ラボという場でして、その当時は京丹後未来会議ということで、若者の自由な発想で、まちづくりに対するアイデアですとか自分の仕事はこんな仕事をやっていきたいという思いがあれば、それを皆の前で発表しながら、アイデアの自走化をしていく場ということで、京丹後未来ラボを3年前に創設して、現在3年目に入っているということになります。その中で一つ生まれてきているのは、京丹後移住支援センターというもの

を昨年5月からスタートさせておりました、Iターン者2名による一般社団法人なのですが、そこが実質に移住希望者の相談に乗ったり、現地を案内したり、実際に移住されてきた方のアフターケアをしたり、そういった事をやっております。市役所側は地域との関係ですとか、補助金のことですとか、色々な後押しを移住者に対してやっていくのですが、その移住支援センターは移住されてきたいという方の相談に乗っているという、本当にソフト的なことをやってくれています。それが一つの協働、官と民の協働の一つの形なのかというふうに思っております、若い子たちがこの町で仕事をしていくということと一緒にやってもらっているということです。

会長： わかりました。ありがとうございます。そうした試みが更にどんどん増えて、基本条例に乗って進んでいくといいなということをおっしゃっていますが、他に何かご意見ないでしょうか。この後、色々なまちづくりのワークショップの話もそうですし、新しいコミュニティの形についての説明もあると思いますし、それも絡む話も色々出てくると思いますので、一度そこをまずお聞きして、議論をやっていきましょうか。そのほうが活発する気がします。

ということで、特に今ここでというよりも後で回させていただきますが、未来のまちづくりワークショップについて、説明をいただいて、委員の皆様からご意見をいただくという形にしたいと思います。その中で、今言った提言に関して何かあればよろしくお願い致します。私もちょっと移動いたします。

委員： はい。それでは、始めさせていただきたいと思います。京丹後市民が考える未来のまちづくりと題しまして、昨年度ですが、私、未来のまちづくりワークショップに携わらせていただきましたので、その振り返りという内容になりますが、京丹後市民がどのようなことを将来的な未来のまちづくりとして考えていらっしゃるのかということをご紹介しながら、振り返ってみたいと思います。時間は30分くらいと聞いております。よろしくお願い致します。手元の資料には自己紹介を書いておりますが、飛ばしていただければと思います。バックグラウンドは都市計画と交通系です。委員の中で何名かの方は昨年度もまちづくりワークショップにご一緒させていただいておりますので、ご存知だと思いますが、ご存知でない方はこの資料をご覧くださいと思います。

さっそく本題に入りますが、未来のまちづくりワークショップ

ですが、これはどのような趣旨で開催して、どのような方々が京丹後市の未来について、色々な意見を述べたのかという概要について触れたいと思います。皆様もご存知の通り、山陰近畿自動車道の大宮峰山道路の延伸等で社会インフラが整備されてきつつあるという中で、京丹後市を取り巻く社会情勢も変化してきている。市民の皆様もよく肌感覚で感じられているのではないかなと思うのですが、そういった中で大きく 3 点について検討しましょうということで、このワークショップを開催しました。

1 点目は持続可能に必要な都市機能や都市拠点の在り方。皆様にとって生活に便利な施設はどこにあったらいいのか。高速道路が延伸する中で、周辺整備をどのようにしたらいいのかとか、そういった視点から都市機能や都市拠点のあり方について意見を賜りました。2 点目は用途地域の指定に向けた取組みということで、この用途地域、専門用語ではありますが、どのようなところに商業地域を作るとか、どういったところに住宅地域を作るとか、そういったエリアをうまく線引きといいますか、線を引きながら、どのようなところをどのように発展させていくのかという方向付けをしていくという取組みについてもご意見を賜りました。3 点目は今後のまちづくりのヒントということで、忌憚のないご意見を賜ったということで、大きく 3 点について検討を致しました。開催時期は昨年 7 月から 11 月までの 4 回開催しまして、多くのご意見を賜りました。メンバーですが、ちょっと具体名は記載せずに、地域団体ですとか、町域代表の人ですとか、交通事業者、子育て世代、青年層ということで、代表の方々にご参加いただき、開催致しました。

続きまして、4 回ですが、具体的にどのようなことについて取組んだのかということございます。まず第 1 回目は都市機能の在り方についてということで、私の方から都市の考え、都市構造の考え方を説明させていただいた上で、お手元にあります資料、本市の総合計画、都市計画マスタープランですね、多くの委員の方が見たことがないということをおっしゃっていたことを記憶しておりますけれども、正に、京丹後市の将来のまちづくりの設計図のようなものですので、それをご確認いただきながら、それから自己紹介を兼ねて、京丹後市のまちづくりに関する意見交換をさせていただきました。それから第 2 回目ですが、他都市ではどんなことをしているのか、事例紹介、それから我が国の近年、コンパクト+ネットワークという言葉を元に、都市の構造を少しコン

コンパクトにして、そのコンパクトの中にいくつか拠点を設けて、そこをしっかりとネットワークを形成する中で、都市の構造を作っていく。そうすることによって、将来の人口減少ですとか少子高齢化に向けた取組を進めていきたいと思いますというそういった内容ですが、それについて説明させていただきました。それを踏まえての意見交換をさせていただきました。詳細については、後程紹介させていただきます。それから第3回ですが、メンバーを大きく3グループに分けて、グループワークですね。皆様どんなお考えを持っておられるのかという意見交換、意見共有をしていただく中で、この都市機能の在り方ですとか、拠点のあり方ですとか、用途地域ですとか、色々な意見をいただきながら、京丹後市の未来のまちづくりについてのご提案をいただきました。第4回は、第1回から3回までのご意見を整理する中で、市長にもお越しいただきまして、情報共有をみんなですて、意見交換という形で4回のワークショップをさせていただきました。

まず1回目ですが、どんなご意見があったのかということ、簡単にご紹介させていただきたいと思います。まず将来的な都市機能の在り方、未来のまちづくりを考える視点ということで、私の方から市民の暮らしを支える、都市の活力や魅力を高める視点、それから公共交通ですとか、延伸する高速道路のネットワーク化、広域に都市が繋がってまいります。手元にあります資料でも、カラーでこのように出させていただいておりますが、京丹後市以外のエリアとも高速道路で繋がっていくわけです。そういった広域化する中で、どのように、考えていったらいいのか。機能をどのように考えていったらいいのか。京丹後市、地都市で整備するもの、それから周辺都市と連携して効率化を図るもの。色々な視点があると思いますので、そういった事について、視点をご提供させていただきました。それから京丹後市の総合計画や都市計画マスタープランについても、お手元の資料を参考にしながら、ご覧いただいて、色々な議論があったということです。その中でも主なご意見として、大きく下に記載させていただいております。まず、事業者を増やしていけるようなまちづくりをしてほしいという意見。それから京丹後市が持っている力を活かしきれていないのではないかということ、それから高速道路の整備と日常生活の安全性を確保してほしいですとか、車に依存しないまちづくりは厳しいのではないか。先ほどの「コンパクト+ネットワーク」はどち

らかと言うと公共交通をしっかりと整備して行って、ネットワークを強化する中で、皆が移動しやすく利便性の高いまちづくりをしていこうというような指示ですが、車をなかなか手放すことは難しいというご意見もございました。それから、自動車以外の手段も考えていく必要がありますねですとか、空き地、空き家対策をしっかりとしないと、このままではまずいですとか、シティープロモーションですね、京丹後市は情報発信や販売力が欠けているという厳しい意見もありました。それから、もう 1 点気になったのが、6 町合併したにも関わらず、バラバラに動いている。もっと 6 町の個性を生かして連携していく必要があるのではないかとか、その他、子ども達が残ってくれるようなまちづくり。先ほど事務局から説明はありましたが、やはり将来的に、皆まちに戻ってくるというような魅力あるまちづくりをしていく必要があるのではないかとというようなことがご意見として上がりました。

続きまして 2 回目ですが、他都市の事例と「コンパクト+ネットワーク」ということで、国としては、コンパクト+ネットワークを図っていくことによって、効果として生活利便性の維持向上ですとか、あるいは地域経済の活性化、行政コストの削減、環境負荷の低減をうたっているわけです。ただ全国共通に同じことをして、同じ効果を得られるのかということ、当然そうではございません。そういった事を踏まえて、京丹後市として、どうあったらいいのかということ、色々なご意見を賜りました。それから、誤解として、すべての人口集落を図るものではありませんとか、一箇所に集めるものではありませんとか、地価変動を図っていくものではありませんという誤解をされないようにということもご説明をさせていただきました。こういった中で主なご意見として、第 2 回目の主なご意見としましては、未来のまちづくりへの移行期間が非効率であるように感じる。やはり将来 10 年あるいは 30 年の未来のまちづくりをしていく中で、当然移行期間があると思います。移行期間がもう少し効率的な視点で物事を進めることができないのかというご意見がございました。それから、どちらかと言うとコンパクトというと都市部のことを考えていて、農村部のことを考えていないのではないかと、農村部は山や田を守る大事な役割を果たしています。農村部をしっかりと守っていくことも重要なのではないかとご意見を賜りました。それから交通機関がなくなったら、住む場所も考えてしまいます。やはりネット

ワークで結ぶことは賛成ですというご意見ですとか、若者を呼びこむためには何か手立てが必要です。その一つとして、高等教育機関、大学誘致も一つの手立てではないですかというご意見も賜りました。京都大学どうですかといわれましたが、それは私の一存では決められませんので、多くの方々にご要望いただければと思います。それから自分の町に愛着がある人が多いので、各町に役割を分担させてはどうかとか、企業においては人材不足にもかかわらず、働く場がないと認識されてしまっているとか、もう少し現状をしっかりと周りに認識していただくことも大事ではないかというご意見がありました。それから最後コンパクトシティではなくて、ネットワークシティをしっかりと京丹後市内に、複数の拠点を立ててネットワーク化したまちづくりをしていく必要があるのではないかというご意見がありました。

続きまして、第3回目です。先ほど申しましたように、第3回目ではグループを作りました。ちょっとこの日、何名かご欠席されましたので、当初予定していた4名ではなくて、3グループで写真にお示ししたとおり、グループに分かれていただきまして、できる限り、属性で固まらないようにしたつもりですが、グループに分かれていただいて、軸、ゾーン、拠点、後程ご説明させていただきますが、この3つの視点を踏まえながら、未来のまちづくりについて自由に意見交換をしていただきました。参考と書いてあります資料、お手元にも都市計画マスタープランはあるのですが、将来の都市像としては、京丹後市としては、人と経済・文化が交流する活力あふれる北近畿の拠点都市を考えたということでございます。目標の実現、この都市像の実現に向けて4つの視点としては、若い世代の仕事や生活の夢を叶えられるまちを目指します。それから、人と人とが交流し、笑顔があふれる町を目指します。それから子育て世代やお年寄りなど世代を問わず、誰もが生き生きと快適に暮らせる町を目指します。誰もが安全で安心して生活できるまちを目指します。このようなことは記載していただいております。こういった視点と思想を踏まえながら、ご意見を色々と聞きだしたということで進めさせていただきました。それから、都市構造ですが、先ほど申し上げましたとおり、高速道路が延伸されるとか、京丹後市の南北軸となる主要な道路、その沿道、駅周辺を基本として、軸ゾーン拠点を設定しております。それから都市利用計画と都市基盤整備を進めている中で、公共交通ネット

ワークの充実による、多極ネットワーク型のまちづくりをうたっていますので、この軸ゾーン拠点について少し説明をしながら、この視点を踏まえながらご意見を賜りました。まず軸ですが、軸とは何かといいますと、お配りの資料の中にも記載があると思います。この資料の右側に軸ゾーン、拠点とありますが、この軸ですね。広域連携軸と、地域連携軸、広域連携軸は、先ほどの山陰近畿自動車道が一つの広域を繋ぐような連携となっている、それから国道 178 号、312 号、482 号や鉄道等については、地域の連携と位置づけられておりますので、この軸について色々見ていただきながら、ご意見をいただけないかということをお願いしました。それから二つ目がゾーンです。このゾーンとは何かといいますと、同じように記載されておりますが、都市活動ゾーンと保全、共生ゾーンです。都市拠点と地域拠点ゾーンにつきましては、主に市街地に該当しまして、それ以外のエリア、緑空間が保全共生ゾーンになります。それぞれのゾーンからもご意見が賜れないかということで、申し上げさせていただきました。それから最後拠点ですが、都市拠点と地域拠点ということで、都市拠点は国道 312 号と 482 号沿いの商業とか交流機能の向上を図れるような、そういった拠点を都市拠点と挙げさせていただいております。それから地域拠点は、先ほどの地域連携にも当てはまるのですが、駅ですとか、市街地における、観光交流機能の向上を図るような拠点として、ここに記載のような拠点につきまして、踏まえてご意見を賜ったということです。こういった 3 つの軸ゾーン拠点の視点を踏まえながらご意見を賜ったということでございますけれども、色々なご意見が出ました。この 3 つのグループ、A グループ、B グループ、C グループでご意見を賜ったものについて、少しご紹介させていただきたいと思います。まず A グループですが、A グループでは、模造紙で、色々な意見を出していただいて、整理していただきました。どなたか整理していただいたのか、図解で矢印なども入れながら、整理していただきました。この図を、私もテキスト情報に落とし込むとこのようなことかなと思います。一つは交流人口の増加ということで、やはり京丹後市はもう少し交流人口を増加させる必要があるのではないか、峰山インターチェンジ周辺にスポーツ施設を誘致してはどうかですとか、高速道路に大型のサービスエリアを設置して、地元の農産物の販売ですとか、地元の情報発信を図っていく必要があるのではないかですとか、峰

山駅をマインの近くに移転できるでしょうか。交通事業者様からは、微妙な反応があったような気がします。立ち寄りを駅と拠点となるような商業施設を連携したほうがいいのではないかという意味あいかなと思うのですが、そういったご意見もありました。それから、二つ目は、子どもや高齢者の安全の確保ということで、医療や福祉施設をもう少し集約して便利にしてみてもどうかというご意見もありました。都市機能の視点からですかね。そういった意見もありました。それから訪日外国人の誘致ということで、私は今日も京都から来ているのですが、非常に訪日外国人が多いですけれども、この京丹後のほうにも訪日外国人を少しでも誘致して、京丹後市の良さを知っていただくとか、観光していただくということが必要ではないか。そのためにはカッコイイ田舎をもっとPRしていく必要があるのではないか。古民家ですとか、自転車というのでも確かあったと思います。バイクレースとかそういった事もあったと思います。それから受入体制ですね。来ていただいても、受入体制がしっかりしていないと満足して観光していただけないなど、英語対応も必要ではないかというご意見もありました。それから自己実現を支援する場の創設ということで、京丹後市が桃源郷としての機能をもっと持ったほうが良いというご意見もありました。これがAグループでございます。各グループやはりメンバーによって、色々な違いが出てきます。Bグループでは、お配りした京丹後市全域の地図に、色々な情報を書きこまれて、付箋などで整理しながら、色々なご意見を賜りました。テキストベースで集約化してしまっていますが、大きく二つの意見がありました。一つは都市拠点の分散配置ということで、買物弱者、買物がなかなか出来ない人達をもう少し救済できないかというご意見、それから、ある程度の拠点を旧6町に整備したらどうか、6町合併しましたが、6町のよさをもっと生かすようなものも、改めて考えてみるかどうかというご意見。それから高速道路のみならず、一般道も要整備ですね。高速道路にフォーカスされていますが、一般道も、もう少し見直ししてはどうですかというご意見もありました。それから学生が活動できる場の創設。これは法の視点だと思うのですが、海沿いでの活動をもう少し考えてはどうかということで、海洋高校でこれはさば缶を作ってはという意味だったと思いますが、そういったご意見です。作っているということですので、作っているのもう少しPRしてはどうかというご

意見です。それから、廃校を利用した大学キャンパス設置ということで、大学を希望されているのでしょうか。というご意見もございました。続きまして、Cグループですが、ここはかなり、要素を抽出されて簡略化した中に閉じこまれていますが、具体的にどういったご意見があったかといいますと、大きく2点です。1点目は私の方から振らせていただいた、軸、ゾーン、拠点の位置づけということで、やはり整備されるインターチェンジが今後軸になってくるでしょう、ですのでインターチェンジをもう少し重点的に検討していく必要がありますねとか、サービスエリアの設置ですとか、インターチェンジ周辺での道の駅設置などが今後大事になってくるのではないかというご意見。それからインターチェンジから各旧6町に繋がるような道路整備も必要ですというご意見もありました。それから各ゾーンの形成ということで、医療、商業、福祉、教育のゾーン形成が今後大事になってくるだろうと、それから充実した子育てができるような町を京丹後市も目指してほしいというご意見、それから海を活かす。水中水族館があったらいいなというご意見もありました。それから自然、食に関する情報発信施設の整備も今後進めていく必要があるでしょうと、これは道の駅とも関連してくるのかなと思います。こういったご意見もありました。それから最後に全体として、その他ということで、やはり京丹後らしさをもっとPRしないといけないといったご意見ですとか、インターチェンジによる交通混雑、安全面の心配ですね。インターチェンジが出来ることによって、負の影響を少しでも小さくしたいというご意見がありました。それから小さな子どもが天候に関係なく遊べる支援センターの整備ということで、宮津市や舞鶴市には子ども達が遊べる場がある、京丹後市にもあったらいいのではないかというご意見がありました。こういった1回目から3回目のご意見を踏まえまして、市長にご説明させていただくとともに、市長のほうからは第4回で、ここに記載のことについてお話がありました。1つは人口減少が進んでいると、特に若年層の流出がかなり進んでいるということで、出ていったままで、更に人口減少が進むと、集落ですとか、魅力ある景観が維持できなくなる。人口減少に歯止めをかける流れを作る必要があるという非常に危機感を持たれた説明でございました。2つ目が山陰近畿自動車道野田川大宮道路の開通ということで、やはり高速道路が開通、延伸ということで、やはりインフラをどう京丹後

市として、活かしていくことができるかというご意見もございました。それから 3 点目は、若者の定住促進のための都市拠点整備の必要性ということで、民間投資を呼び込むために規制という考え方ではなくて、積極的な都市機能の誘引を図る視点で用途地域を活用しようと考えていますと、これ作ってはダメではなくて、これをもっと作ってほしいとかそういった視点からの用途地域、土地利用の活用を考えていきたいということをおっしゃっていました。それから都市拠点の必要な機能、色々なご意見がありました。市長としても市民と議論を進めて、京丹後市の将来の都市機能、都市拠点を考えていきたいというご説明がありました。その後、色々な意見交換があったのですが、どちらかと言うと要望に近いご意見でしたので、ここまででこの未来のまちづくりワークショップとしては、市民、限られた人数のご意見でございましたが、京丹後市を代表する市民の方々のご意見として今申し上げたようなご意見が出たということでご説明、ご報告させていただきたいと思っております。以上でございます。

会 長： はい。ありがとうございます。今詳細に説明をいただきました、この未来のまちづくりワークショップで出ていた意見をまた振り返っていただいて、ご質問あるいはご意見、この意見について自分は賛成である、あるいはここはおかしいとか色々あると思いますが、何でも自由にご発言していただければと思います。ということで、どうでしょうか。今の説明を聞いて何かご意見がないでしょうか。

委 員： 昨年度ご参加いただいたメンバーの方で、私の説明で漏れている内容があれば、是非ご発言いただければと思います。どなたでも結構です。

会 長： どうぞ、ご自由にご発言ください。

委 員： 都市のマスタープラン、都市の部分での目線でこういったものは見られているということで分かりますが、以前に福祉ゾーンだとか、観光ゾーンだとか、これは総合計画にあったのでしょうか。それぞれの色々なゾーンであるわけですが、それが今も生きているのかどうか分からないのですが、その辺をちょっとよろしくお願いします。

事 務 局： すいません。本日つけさせていただいております資料、総合計画の 114 ページ、115 ページにこれは従前から変わらない軸、ゾーン、それぞれのゾーン、ということで設定されたものをつけさせ

ていただいております、これはしっかりと生きております。都市計画のマスタープランについては、あくまでも都市計画の区域のマスタープランですので、当然都市計画区域に入っていない部分は、マスタープランには入っていないので、全体としては総合計画のこちらの考え方になるということでございます。

委員： そういったゾーンがあつての、この都市計画の目線で言っているという理解をしていいですね。

委員： おっしゃる通りだと思います。総合計画マスタープランを踏まえた上で、けれどもすべて従うのではなくて、基本自由なご意見を賜るということで、昨年度開催させて頂きました。

委員： もう 1 点いいですか。最初に言えばよかったのですが、色々思いがありまして、なかなか言葉にするのが難しかったので、言えなかったのですが、例えば、アンケートを中学生から取りましたね。そのアンケートもやはりしっかりと活かしていくということで、対応をしていかなければいけないかなと思います。アンケートを地域に実際に投げていくとか、それから中学生にやはり結果でも返していく、大まかな方法で返していくという一連のものがあって、初めて地域がこういった事で頑張っているのだなというのを感じ取ってもらって、また大きくなったら帰って来ようかということに繋がればいいかなと思いますので、そういった一連の行為が必要だと思いますので、アンケートは取ったが、それで終わりですよということではなくて、やはりしっかりと活かしていくということも今後、考えてもらえたらなと思っておりますし、それから各住民、市民が参加するという事で、各分野でのリーダー育成ということを行っております。ただ、やはりしっかりと勉強してもそれだけで終わってしまう。地域に活かしていないのではないかな。活かしていることもあるかもしれないのですが、やはり地域での受け皿、構える体制があつてのそういったリーダーが伸びていくものだと思っておりますので、そういったところをしっかりとこれから作り上げていかないといけないのではないかなと思いますし、京丹後市も一生懸命頑張っております。例えば自治区にしましたら、小規模多機能自治を研究、検討して、人口が少なくなってくると、地域の機能を維持するためには助け合っていく、隣の地域同士で助け合っていくという、そういった多機能自治をやはり検討、研究しようということで動き始めました。そしてそれを新たに、活かすということで新コミュニティの

事業へと今展開しているという経過がございます。そういった事によって地域も変わってきておりますので、そういったところもどんどんとかういった会議でも出していただければと思っております。それと先ほどの話で、さば缶とかありましたがさば缶で、この前宇川の加工所に視察に行きまして、宮津の海洋高校が作っているのですが、それをどう活かそうかということで、加工所では地域のラベル、さば缶の缶を包むものを作って、地域の紹介をしている。それも一つの方法で、活かす方法だなと思っております。そうやって協力し合って、地域をしっかりと考えて動かしていくことも大切だなという風を感じております。以上です。

会長： ありがとうございます。後半のほうで今おっしゃった、小規模多機能自治もそうですし、真ん中でおっしゃっていた地域リーダー作りのことも、この後の新しいコミュニティのところはかなりしっかり議論しないといけないことだと思います。最初におっしゃった、中学生に対してアンケート結果を説明しているのか、返しているのかどうか、これは単純な質問ですが、どうですか。やっているのでしょうか。

事務局： アンケート結果については、それぞれ学校にはお返しさせていただいております。ただ、アンケートに答えてくれるのが、中学3年生にお願いしておりますので、返ってくるときには、卒業しているのか、次の年代になっているということは確かにあります。

会長： ある意味、次の年代に対しても返していくということでもいいような気がするのです。中学生に対してアンケートしました。ただ単にアンケートに協力してもらっただけじゃなくて、結果を見せて、市としてもこのように動こうとしているのだよということを学校教育現場でも説明していくということも将来を見据えるとすごく大切だと思います。たぶんそういった趣旨が今あると思います。他にいかがですか。色々な論点あると思いますが、ご自由にご発言ください。この中に出てきたコンパクトシティあるいは、ネットワーク化という議論がありました。私もコンパクトシティということを目指していくには、京丹後市は地域的にも、多様性があり、かつ広大だと見ておりますので、やはり色々指摘されるご意見がかなり中心的なものだと思っております。そういった意味では、このネットワークというのがいい方向性だなと思っております。コンパクト+ネットワークが地域拠点をつくりながらだと思っております。ネットワークというのが具体的に何を軸に

において考えていけばいいのかということが、これはちょっと専門家としてもう少し説明いただければと思います。

委員： 基本的には、公共交通や鉄道バス、ただ皆様ご存知のように、京都丹後鉄道、ネットワークの中心になるのかということ、やはり本数も少ないですし、拠点と拠点を何で繋げていくのか。ネットワークのあり方自体を考えていかないといけないのだろうなと思います。それから後は、すべて全国的にコンパクト+ネットワークでネットワークの公共交通ではなくて、京丹後市は京丹後市なりのネットワークの作り方、もしくは自動車ですとか、自動車がすべてではありませんので、そういった取組みですとか、あるいは全国的に有名ですが、丹後町がウーバーのシステムを使って地域で移動手段を確保しているということをやられています、そういったところと上手く連携しながら、ネットワーク化を図っていく必要があると思います。

会長： ありがとうございます。補足説明でした。どうでしょう。このことを踏まえて、何かご質問等ないでしょうか。

委員： 今ウーバーの話が出ました。ウーバーのアプリを使って、自家用のタクシーを運用しておりますNPOの副理事長も実はしております。そういった点で、今回のまちづくりのワークショップの中で、A、B、Cですかね。それぞれのご意見は全くごもつともだと思いますが、一方で京丹後市民が考える未来のまちづくりというこの冠からして、私も地域を預かる区長をしている中で、未来のまちづくりという観点から、現状の我々の地域でとりわけ丹後町は過疎化が進んでおりまして、先ほどウーバーのタクシーも、ある面で、過疎がゆえに国から認められたという背景があるものですから、未来のまちづくりという面ではものすごく、そういったら大変失礼ですが、違和感を感じるような、厳しい現実があるわけですね。もっと具体的に言えば、例えば私のところの集落は約2000人おりますが、現実の問題として、共同墓地も抱えているのですが、墓終いといった事がかなり具体的におきております。それと、共同墓を作ってほしいというような10年前なら考えられないような現象が、ただ単に、空き家の問題だけではなくて、正に縮小していくというか、消滅のカテゴリーに入っているのかなと感じておりまして、そういった点からすると、この未来のことについて、本当に危機感を持っております。そして、あるグループに買物難民とか、買物弱者への対応ということが言われて

おりますが、私のところの宇川地域は、今は民間事業者が週1回、来ていただいておりますが、実はこれがなかなか難しくなりつつあります。昨日理事会を開いていたら、そういった話が出ておりまして、これもなかなか厳しいなという事で、ではどうやってその地域で安心して住むことが出来るのか、安心、安全に、医療、買物とか、かなり具体的な要素が求められてきております。NPOだけじゃなくて、地域の区長の立場からすると、本当に深刻だと思っております。そういった点からすると、このまちづくり計画は当然必要なものではありませんが、若干距離があって、もう少し中長期で考えれば、未来のまちづくりは当然取り組むべきですが、目の前で起きている現象に、どうやって対応するのかということ、これは地域だけではなくて、行政と一緒に考えていく。そういった段階に来ておりますので、言葉でなかなか表現がしにくいのですが、では何が出来るのかということですが、目の前で起きていること、一つ一つ解決して対応していくということです。だから若い皆様、10年、20年先の事を考えたら、未来のまちづくりのことを考えたら、あなた方の気持ちで会議に参加させていただきます。以上です。

会 長： 非常によくわかる気がします。先ほどおっしゃった、そうですね。過疎地指定があるからこそ、ウーバー的なシステムを使うべきだというのが、国の規制が根本にあることですから、そうなっているのだと思いますし、本当にそういった意味では厳しい現実があるということですね。買物のことも、ネットワークに関する事ですので、今おっしゃったのですが、これは実際どうなのですか。ここに主婦の方もたくさんいらっしゃいますが、もちろん主婦ではない方も色々なところで買物をされていますが、どうですか、例えば今おっしゃった宇川地区での買物難民の実態ですが、今どんな状況になっているのでしょうか。

委 員： 現在は、いととめ様が週1回ですかね。週1回来ていただいております。大宮から。それがこの2月から始まったのですが、地元のにしがき様が閉店をされて、それ以降、地元の有志の皆様がお願いをして、移動販売として入ってきていただいているわけです。具体的に宇川地域の店を閉まわれましたので、相当数が間人に来ております。でもどうしても、車を所有していない高齢の方は、そういった移動販売車を利用している現状です。あとは、私のところはデマンドバスも市から委託を受けておりますので、そ

れを利用されてる人もありますし、今言ったさきえ合いのウーバーのシステムで来られる方もあります。だから両面でやっておるのですが、なかなか市のデマンドバスは予約の仕組みになっております。前日予約。あとはウーバーですが、ウーバーはリアルタイムで出来るのですが、ただ乗る場所が丹後町からしか乗れない。弥栄病院や峰山の病院まで来て、帰りは通常の民間のタクシーを使ってください。それとか、与謝の海の北部医療センターまで行きたいという方もあるのですが、これはダメなのです。ある面では民間の事業者のある種規制によって、住み難くなっているといえるわけです。でも先ほど言いました、過疎がゆえに、国も国交省も認めていただいておりますが、昨年1年間で約100件の視察があったのです。ウーバーの。全国から来られるのですが、この頃最近は、行くケースが求められて、今度は桐生に行くのですが、しかし行っても、どうしても地域公共交通会議で断念されたのです。来るのはいいのですが、これはうちの町には無理だなという形です。だからそういった点からすると、宇川地域、実は昨日理事会で相当この話が出て、何とかNPOでその辺の仕組みが出来ないのかなという議論をしましたが、正にリアルタイムの問題なのです。ここで未来のまちづくりというテーブルにおれるような猶予はないのです。そういったところです。

会 長： これは先ほど出ていた、まちづくりの移行期間が効率的ではないのではないかということもあったのですが、理解していいですね。正に待ったなしの状況でどうするのかですよね、もちろんここでその解決策が出るということはないかもしれませんが、色々なことの話をしている中でも方向性が見えることがあるかもしれないですね。どうですか。今の話を聞いて。

委 員： 前回Cグループだったのですが、結局、今回メンバーも変わっていますし、そうするとまた意見が違ってきて、こういった意見を出しても、それが現実に行くのかどうかは行政に任せるしかないのですが、先ほどの人口減少とかもそうですが、全国的に日本は全部がどこも人口減少になっている中で、奪い合いといたら失礼ですが、来てもらえるのであったらよその地域に行かずにうちに来てくださいということですが、結局魅力がないと来てもらえない。一番手っ取り早いのが、子育て世代の方に来てもらったら、お子さんもいて、お子さんが健やかに育って、そして人口も増えて、そこで職場ということも問題になってくるのですが、何

か魅力が全部と言うとなかなかですので、絞って、やはり特化していくというか、アピールしていく、外の町に、マスコミなどに取り上げてもらえるようなアピール化、京丹後市はこんな事をやっているみたいだね。すごくおいしい食べ物もあるし、いいのではないかと町民自らが奮い立って、こうしていこうと、前向きな気持ちを持っていかないと、暗くなるばかりだと思うので、そこら辺をやはり、見える化というか、何かそういったプロジェクトと言うか、今クラウドファンディングと言うのですが、インターネットでこんな事をしますので、皆様寄附してくださいというのもありますし、本当に優秀な職員様がいる、形を変えたら、大企業なわけじゃないですか、そういった市役所の人達が一丸となって、私たちのつたない意見を聞いていただく中で、プロジェクトチームを作ってください、そこでもっと早くスピーディーに何かを実現していってもらわないと、こういった意見を言うだけで終わってしまうのは、先ほどのアンケートと一緒に前に進まないと思うので、そこがちょっと今回もスピーディーに出来ないのかなという気持ちがします。

会長： ありがとうございます。本当に課題に答えながらスピーディーにというのが大変ですが、やらざるをえない。やらないといけないという状況ですよね。今ちょっとまた考えるとします。どうですか、まだご発言いただいていない方。どうでしょうか。別にまとまったことじゃなくてもいいです。何かお話いただければと思うのですが、どうでしょうか。

委員： はい。すみません。私共の現状の報告になってしまって申し訳ないのですが、社会福祉協議会でも、もちろん移動の問題、買物の問題は、宇川に職員も地元の皆様の話し合いの場に行かせていただきながら、地域の人のお話を聞いて、持ち帰ってみて、どういったことが社協で取り組めるかということを考えて、なかなか実現に向かっているかということが、実際にはなかなかないのですが、一つ今やっているのは、宇川地域には入ってはいないのですが、社協が元々持っていた車を貸し出すので、その車を地域で運転手が運転して、地域の高齢者の方が乗って、その地域で診療所に行ったりとか、サロンに行ったり、老人会に行くのも地域の方が運転して行って、お金について、ガソリン代は乗った人が負担していくというやり方をしているのが、一つやっています。これは地区のささえ合いを、社協として支えるという足の問題につい

てはやっているのと、それから福祉有償は、これは制度的なものですので、どこの社協様でも多くのところは取り組まれておりますし、それは公共交通機関をお一人では乗れない方、それは体の問題であったり、認知症の問題であったり、一人では乗れない方の送迎を、病院に限ってはさせていただいていること、それからもう 1 点は、買物支援ということで、バス停がない地域、地区の区長様にお話をさせてもらって、買物を月 1 回ですが、ここに車が来たら乗っていきますかという、希望者がある地区については、曜日を決めて、月に 1 度だけですが、社協の車で社協の職員が地域の商業施設まで、買物の車を出しているということがあります。そうですね。社協でやっている、買物支援ですとか移動の支援は、そういったものがあつたりするのと、あとは地区で高齢者の方、子ども達のサロンがありますが、その方々も 1 回くらいはどこかに遊びにいきたいですよと言って、でも 20 名くらいの方が皆で移動しようと思ったら、バスを借りないといけない。バスって高いじゃないですか、では社協のバスを 1 地区に対して、1 回だけ、しかも福祉委員様がやっているサロンにつきましては、社協の事業として、職員が運転をして、費用は全部社協持ちでいくというものもさせていただいたりして、本当に暮らしにどうやってやるのかということとは分かりませんが、できるところは一つずつやっていくのを今やっているのと、後は、最近では社協ではないですが、弥栄のはごろも苑様のご自身で持っておられる車を活かして、デイサービスの送迎の車の空き時間だと思ふのですが、その車を活かして、買物支援を今月第 1 回目をやられて、等楽寺に入られたと思ふのです。そして民間が地域貢献として、何ができるのかということを考える力を持っておられるといたしますか、その辺は福祉を取り組んでおられる法人がたくさんありますので、この声がこの思いが届くと、交通の関係のお仕事をされていない方でも、地域貢献として、何か課題解決するために動いていくということが何かあるのではないかと思いますし、そういった事を伝えていくということが私たち社会福祉協議会の一つの大きな役割であるのだと思ひながら、頑張ります。

会 長： ちょっと気持ちは明るくなりますね。ありがとうございます。結局でも今のお話でも出てきた、社協の車を使っていくというのが典型的なのですが、今空いているものをどう知らせていくのかということを考えるべき点だと思います。すごく先進的だと思います。

ます。先ほどおっしゃった、ネットワークでやっていくということでも、このシェアの発想は重要ですよ。

委員： おっしゃるとおりで、今言っておられました、空いている車をどう活用するのか、あるいは空いているドライバー様をどう活用するのかという視点で、考えていかないといけないというのが、今後大事だと思います。京都市もかなり広域で、山間部の足をどう確保するのかということで、各病院が各自前の車を用意して、ドライバーを用意して、送迎しているのですが、本当にそれが効率的なのか、色々な議論をされています。そのはしりを今やられていると思いますので、是非ご検討いただければと思いますし、先ほどおっしゃいましたが、どう何をシェアするのかを考えないといけないですし、シェアをするための、プラットフォーム、ウーバーですとアプリですし、アプリではなくて、それがコミュニティでもいいですし、あるいは何かの市役所のどこかの場所でもいいですし、みんなで何か困っていることですか、やりたいこと、楽しみたいことをシェアできる、共有できるような場とか空間とかが必要ではないかなと思いました。

会長： ありがとうございます。こういったご発言をいただきますと、このまちづくりの基本条例の中に入るのかどうか、ともかくですが、いずれにしても、まちづくりの方向性として進めていただいておりますが、シェアの考え方を京丹後市としてもしっかりと進めていくということが見えてくる気がします。大事な点だろうと思います。ここでちょっと私の基本的な質問です。スーパーからの配達のシステムはどうなっているのですか。例えば宇川からの配達はあるのですか。

委員： これは、行政のほうはよくご存知なのですが、とくし丸という四国のほうのお店が商品を提供して、個人がドライバーになって契約を結んでという仕組みを持っていたのですが、当初こちらのスーパーがあまり前向きではなかった。何かにしがき様も募集していて、ある種、とくし丸の仕組みをどうも入れてきつつあるのです。けれども裏を返せば、それが成立したら、店終いしないのではないかと、その流れの中にあるのではないかなと実はいるのですが、先ほど言いました、色々な社協の仕組みもあるのですが、昨日我々が考えたのは、自治区ですとか、NPOだったら、地域公共交通会議にかけない方式、無償だったらいいのです。無償だったら地域公共交通会議とか、民間事業者にクレームをつけられ

ることもないのです。逆に言ったら、自治区とかいうのは区費に乗せてみようと、全戸、ある種会員ですよ。それだったら何も問題ないです。その仕組みが可能なのかどうかというディスカッションをしていたのです。だから決して社協とかがやっている取組だとか、空いた車だとか、本当は空いた車が行政も私どものデマンドバスでもあるのですが、これがなかなか行政のなかで、なかなか医療部が持っている、診療所の送迎バスの空いたバスを他で使わせてと言ったら、他の医療部がいいと言わないし、行政の中で壁がある。デマンドはかなり時間が空いているので、その車両を使わせてくれたらいいのに、いくらでも出来ますが、これも一つ考えてほしいなと思っております。それとちょっと若干視点は違うのですが、8月終わりに私どもの自治区に、広島と兵庫県朝来に行ってきたのですが、朝来の人口が1200くらいの集落の区長様が言っていました、そこは若者が入ってきて、若干増えているのですが、その区長いわく、基本的に各自治区とか、市町村の子育て支援の手当ては厚くて、だからその事によって、入ってくる人は全然期待していない。そんなことは、ただ単ににんじんをぶら下げられて、それに食いつく話とか、全く市が取り組む成果として、自治区としての、ただ単に子どもの成長が終わったら出ていく人もいます。そういった視点ではっきり言う。そうではなくて、地域に密着していく、伝統文化だとか、そういった事に共感共明をしていただける人に入ってきてほしい。そういった事ははっきりと申していた。だから行政もそういった視点で、ただ単に、隣の町より、子育て支援が低いサービスは困りますが、それを手厚くすればいいということではない。という話をされました。私たちも共感できるなと話をしていたのです。若干違いますが。

会 長： ありがとうございます。町もある意味、戦略的なもので、どういった人に来てほしいかということがありますからね。先ほど、前半でおっしゃっていたことになるのですが、これが先ほどおっしゃっていた話と重なりますが、全部業としてやっていくと色々な規制で難しくなってきますが、NPOを活用しながら、市民同士の自発的な助け合いの中でシェアがすすんでいくみたいなものを後押ししていくということで、住み分ける道が色々見えてくると思います。それはやはり京丹後市としても方向性として考えるところかなと今話を聞いて思います。他にどうでしょうか。

委員： 最初に頂いた資料 1 の中で、新川先生からの 3 つの視点、私は 3 つ目の市民がどう変わったかという所が私関係しているのかなと思っています。協働で言うのは、先ほども自治区に要望を聞きにいくと、2 千 3 千、住民の側の要望を聞くだけが協働ではないと思っております、やはり市民の意識が変わって、市民自らが動く、先ほどおっしゃった町民自らが動くこと、民間が地域貢献をすることを、そういう風にかにもっていけるかという辺りで、最初に指摘いただいた、中間支援組織、民間、NPO、市民団体が活動しやすくなるような中間支援の組織が少し足りていないと感じております。そういった意味では正に社協様が中間支援の組織だと思っておりますし、先ほど例として上げられた移住の中間支援ということですが、何か分野に特化したものではなくて、全体として、NPO 活動など市民活動が活発になるような中間支援の組織は必要だなと思っております。京都府の NPO パートナーシップセンターと連携していくということもどこかに書いていただいていたと思いますので、今後は是非今まで以上に連携をしていただいて、パートナーシップセンターもその役割も担っていただけらなと思っております。以上です。

会長： ありがとうございます。私がまとめるよりうまくまとめてくれたと思います。今まとめていく部分としてもお使いいただければと思います。

委員： 一番気になったというか、心に残ったのは、雨の日でも室内で遊べるような支援センターの話があったと思うのですが、この声は私もすごく周りの友達から聞いていることとして、各保育所に支援センターはあるのですが、1 家庭につき、1 箇所しか登録はできないということであったり、後は行く日が年齢によって決まっているということがあって、行きたい時にいける場所がないということはよく聞いています。宮津とか近くに来ただけで、やっぱりちょっと遠いという声があり、その場で大きい子と小さい子を分けていないから、やはりちょっと行っても小さい子の場合は、大きい子がいると、遊ぶのに躊躇してしまうとか、色々な声が聞かれて、もしこういった施設が京丹後市に出来ることがあれば、すごく現場というか声を聞いて、しっかり建ててほしいなというのをすごく思いがありました。建てた。ではこれで市は満足というのではなくて、フォローなどをしっかりしてほしいなと思いました。

会長： ありがとうございます。本当に子育て世代の声をどこまで本気で聞けるのかということは、町にとって、未来にとってすごく大きなことですね。

委員： 今の続きの話ですが、私、実は実家が東京で孫がいるので、今の意見とかも前も言わせてもらったと思うのですが、天気の悪い時、家で見ていても、今の子どもって手がかかってしょうがない。楽しいところに連れていく、そうすると本当にすごく広いところですが、そこは民間がやっているところで、ボールの海になっていて、たくさん滑り台とかも、遊具もあって、落ちても痛くないから、ボールの中にもぐったり、楽しそうにしている、そういったところには、おもちゃとか小さい子も遊べるコーナーもあって、男の子のコーナーみたいなものもありますし、この前横浜にも行ったのですが、そういった遊び場があるのですが、超満員です。その一番上には、広いと言っても、クレーンがちゃんと効いていて、小動物もいるので、ふれあい広場みたいな形で、ひよことか小動物がいるところのゾーンとか、怖い動物がいるゾーンもあって、そこはデートコースになっていて、すごい人がたくさんで、2時間待ちくらいで、すごいなと思うくらい、施設があったのですが、それを京丹後市が建てるというのはちょっと無理な話かもしれませんが、私がお金あったら建てたいなといつも夢見たいに思っているのですが、なかなかお金がないので、本当に申し訳ないのですが、そんな夢の施設が、大人でも楽しめるような施設があれば、もちろん有料です。もちろん有料ですが、5千円とかではなくて、数千円くらいで、それでも楽しめる。私の大人が行っても楽しいなという感じ、うきうきするところがあると、他のところから、この近隣の人も来るじゃないですか、今度の休み、30分かけていこうかみたいな、ここから豊岡に遊びにいこうかというイメージで、そういったものがあつたらいいなと思うのですが、みんなで出資して作りましょうか。失礼しました。

会長： いいじゃないですか。夢もまずは出してみないと、まずは現実から。どうですか。

委員： うちも、子育て世代なのです。子どもが4人いるのですが、雨の日は、家でずっとゲームしています。うちの子は、だからどこかに行ったらいいのにとってはいるのですが、なかなかないみたいですが、青年会議所も、色々と取組みをしている中で、持続可能な地域づくりという所、持続可能という所をキーワードに今

年はやっていて、そこにビジネスの機会みたいなところが入ってきていて、そういった遊び場とか、有料でやるのもやっぱり儲からないと、持続可能じゃないと思うのです。ボランティアでやるのにも限界があると思うのです。なので、そこをお金までかかってくると、他のところから色々な企業が入ってきて、儲かるって分かったらたぶん入ってくると思うのです。そういった儲かるようなサービスというか、お金はあるのかもしれないのですが、そこはそういった地域なので、皆で協力してもいいかもしれませんが、一つの手段としては、企業を連れてきて、儲かるようなところで、サービスをしてもらうということも一つの手だと思います。うちが商売しているのでかもしれませんが、儲かっているのなら、配達しますみたいな、そこは仕方ないのではないかなと個人的には思います。

会長： ありがとうございます。マーケットが必ず続くということがありますね。わかりました。ここまでのお話の中で、アドバイザーで来ている新川先生にもアドバイスをいただければと思うのですが。

アドバイザー： はい。色々と委員の皆様方のお話を聞かせていただきました。一応役割としては、まちづくり基本条例の見直しということがありますので、そちらの観点で少しお話をさせていただきます。基本的な論点はやはり、このまちづくり基本条例が参加と協働ということ掲げて、これをどう実現していくのか、そこに狙いがありますので、そういった観点で皆様方のご意見というのを少し、これからの条例の見直しやあるいは、この条例に従った市政運営にどのように反映していったらいいのかという観点でお話をさせていただきたいと思っております。今日最初にお話がありました、ワークショップでこれからのまちづくり拠点、あるいは都市計画を考えていくという手法についてご紹介いただきました。こうした拠点づくりや事業など、こうしたワークショップ方式というのは議論を重ねて、そしてその中で良い知恵を集めていくという点では、非常に有効な手法かなと思いつつながら、お話を聞いておりました。もしもこの計画というのを、行政が例えば、どこかのコンサルティング事業に丸投げして出してきた時に、どのような答えになるのかということを考えてみていただくと、中身としては、もしかしたらスマートのものが出来るかもしれないのですが、本当に京丹後市民の皆様方の意向に心に沿ったものが出来るのかど

うかはわからないなと思っております。そういった点ではこういった施策や事業ごとにそれぞれの特徴や性格がありますので、それにあわせて企画しないといけないのですが、こういった色々な参加方法をもう少し整理をして、市の仕事としてこういった事をやっていく時には、市民参加の時にはこういったやり方を、標準的には考えないといけないですよということ、今後具体的に進めていく必要があるのではないかと思いつきながらお話を聞いておりました。加えて、せっかくこういったワークショップやその他の色々な参加を取っております。これが参加をした後、どうなっていくのか、これはアンケート調査も同じことだったのですが、その結果とか、それがどのように市政に反映されていったのかということの説明責任はやはり市にあると思っております。そういったところを通じて、市民参加というのが実質的な影響力を持てるようなそういった形にして考えていかなければいけないなどあわせて感じたところ、参加の方法を考えていく上でも、こういった最後責任のある参加の仕方、市政なりを考えようということ、問題定義をさせていただきます。2つ目の論点は、もう一つの協働という所です。色々な参加をして、その中に協働という延長上にあるのかもしれないのですが、やはりこれからの京丹後市の中で、先ほどから、地域やそれぞれの現場での困り事ということについて、色々のご意見をいただきました。それぞれの地域ごとに事情が違っておられますので、それを一緒にしてこういった方向でというのはなかなか難しいのですが、もう一方ではそれぞれの地域の独自性を踏まえながら、そして地域自身で、それぞれの地域のあり方を考えていただく、そういった自治の仕組みのようなものもこれから考えていかなければいけないのだろうな、それが地域の協働のような形で組み立てられていく、これが協働の一つの方向かなと思いつきながら、お話を聞いておりました。ただ、その中でも、少し具体的に考えておかないといけないのは、それぞれの地域ごとの問題とか課題が違ってきますので、それについてこういった地域の協働を組み立てていったらいいのか、先ほどの宇川の話では買物の話ですとか、交通手段の話のご意見をいただきました。こういった所の事業は協働型でどのように進めていくのが持続可能で、将来の地域の機能、地域で必要とするサービスをどのように認識していくのかという所に関わっていきますので、そういったところを協働の仕組みでどう解決していきけるのかという、

そういった事業の協働という言い方をしたらいいかなと思っておりますが、事業協働という形をどのように作っていくのかということは、協働の中でももう一つ課題かなと思っております。こういった協働というのを実際に進めていくということも地域だけ、行政だけで考えようとしても難しいという所がありますので、こういった協働推進のために、もう少し色々な知恵を集めて関係者の方々と一緒に議論をする場が必要なかもしれないということで、パートナーシップセンターの話もありましたが、こういった協働作り、協働推進のためのそれを支えていくような枠組み、仕組み、ちょっとした外からの知恵や手助け、そういった事が出来るような中間支援という言い方もありますし、市民活動支援という言い方もあるのかもしれませんが、そういった事の必要性も改めて強調されたかなということも思っております。この辺は、なかなか条例の中でどこまで書き込めるかという所が難しいところはありますが、もう一方では、条例に沿った運用ということをこれからの市政や市民生活の中で考えていくべき重要なポイントかなと思っております。それから参加とか協働とかを考えていく上で、その一種の前提、あるいはそれを進めていく上で重要な条件になってきますのが、色々な担い手の人達が、フラットに参加して議論が出来る様なそんな場をどう作れるのかということになると思います。どうしても声の大きい人、従来からやっていた人だけで議論してしまうと、その路線で行き詰ってしまう、これが従来の行政のやり方の行き詰まりの仕方なのですが、それをどう超えていくのかということで、色々な立場、色々な違った人達の声を出してもらおうような、そんなまちづくりが大事だろうと改めて思っております。特に事業者の方々、というのがどうしても、どうせお金儲けだろうと思われて、なかなか地域でも行政でも入ってもらいにくかったかもしれませんが、こういったところも必要かなと思っております。もう1点だけ、これは追加であります。こういった活動をしていく時に、今日も公共交通の話もそうですし、地域の教育や福祉の問題、保健医療の議論もそうですが、今や日本中どここの地域に行っても、技術革新の域を逃れられないだろうと思っております。要するに、情報通信技術がどんどん発達しますので、その中で画面見るのは嫌だというお年寄りもまだいらっしゃいますが、これからは画面を見なければ生きていけないという、そういった時代にも一方でなっていくというこ

とでございます。そうすると、情報技術の発達を前提にして、スマホやタブレットを前提にした、時期も考えていかざるをえないと思いますし、それが実は通信だけではなくて、先ほど言った公共交通も、すでに自動運転というのが、かなり実用段階で議論されております。更には、宅配や買物ということ言えば、ドローンやヘリコプター、空を飛ぶもので運ぶというものも、実用化の議論になってきております。技術革新のスピードは速いので、こんな事を議論しているのが、5年10年先でしょうということではなくて、本当に数年先に実現するかもしれません。こういった技術革新の動きというのをしっかり見据えながら、積極的に取り組んでいくと、恐らく宇川の話もそうだろうと思いますが、地域はある意味では縮小し、そして従来型の経済活力は低くなっているけれども、でも新しい技術や、新しい知恵でもって、その地域を活発にしていくということも、大いに可能ではないか。そんなことを思いながらお話を聞いておりました。以上です。

会長： 新川先生、ありがとうございます。先生のほうでかなりまとめに近いことも話されておられましたので、どういった意見が出たかというのは、次の時にデータを持って、私から振り返って整理したいと思います。また2のほうがありまして、持続可能な地域づくりの取組みについてという所ですが、こちらも議論としてかなり関係しますので、入っていきたいと思います。これは事務局からの説明ですね。よろしくをお願いします。

事務局： はい。失礼します。

(資料2説明)

会長： はい。ありがとうございます。今お聞きいただいた通りなのですが、とにかく男性が中心の世帯数ベースだけで進んできた傾向があった、あるいは限界集落、準限界集落が増えてきている中で、従来の行政区ベースでやっていくのは限界があるということで、だいたい、地区、公民館区域を念頭において、新たな横繋がりのコミュニティを作っていこうという、このこと自体が市民が主体となって、自分達自身でまちづくりをしていくということに資するのだということを進めているのだと思います。非常に画期的なものになってくると思いますが、では誰がやるのかという問題が今出ているというのが今ありましたが、そういった事に関して、委員の方々のご意見、自由なご意見をいただきたいと思います。どうでしょうか。ご意見がある方はご発言をください。

委員： すいません。社協だからということで実は、これは市民の方が持ってきてくださって、これを見てということでお話を弥栄の方が持ってきてくださったのです。是非、これからどのように市が地域をどのように捉えて進めていくのかということをお話を社協の職員として一緒に話をしながら進んでいくということが出来ればと思っていて、実際に地域の中で起きていることを、地域の中で解決していきましょうねということで、それは過去から社協もそういった取組みを福祉場面ではありますが、進めている中で、大きいことは、地域がどのような地域なのか、どのように組織されているのか、ということがすごく影響することなのです。ですので、ものすごく大きい動きなので、出来れば社協職員皆が理解しながら、今後どのように福祉委員は関わってくるかもしれませんが、まちづくりをどのようにするのかということ、考えて一緒にいかないといけないことだと思いますので、これはまた違うかもしれませんが、一緒に勉強させていただければ、一緒に取組みさせていただければと思いますので、またよろしくお願ひします。

事務局： 是非よろしくお願ひします。

委員： 実際福祉委員様を例えば選出するのはどこからかとか、公民館の活動と、福祉委員様の活動は非常に似ているところがあったりとか、社協が進めている地域の交流の行事の問題とかもやる人は本当に同じ人で、なのにこっちは公民館事業、こっちは社協からの事業、こっちは健康推進課からやってきてという、目的が一つなのにあれもして、これもしてというのがよく聞くお話なのです。それで、この大きな動きがあるのなら、せっかくならできるだけ一つにするといいますか、行政や社協からの矢印が一方に向かうという方向ではなくて、課題を持っている人達、この課題を持っている人達が、どこに向かって矢印を向けていくのかという、矢印の方向が反対といいますか、この住んでいる人が、公民館の問題、それから健康推進課のほうに助けてほしい、これは福祉の問題とか、その人が発信して回りが連携するというやり方でないと、上手くいかない、今は地域に向かってそれぞれが矢印を向けている、全く反対のやり方をしている気がして、いいチャンスだと思いますので、是非とも、研修会でもしてもらえればと思います。

会長： おもしろいですね。なるほど。中心になる人がいて、本当に課題発信があちこちに届けていく。

- 委員：　そうですね。必要なところが行政だったり、そういったところが、この人に対して、人がチームを組めばいいのであって、そういった体制を周りが勉強していればいいだけであって、何か一生懸命になっていて、矢印が反対だなといつも思っております。
- 会長：　ハブみたいな人が必要だということですね。わかりました。どうでしょうか。皆様どんなことでも結構ですが、ご発言いただけますでしょうか。
- 委員：　今お話がありました地域づくりについてですが、この話は 2 度や 3 度お聞きしているところなのですが、先ほど 8 月に私のところは視察研修に行ったと申し上げたのですが、実践している地域で言えば、どちらかといったら、組織図の 3 に近いようなところで、お聞きしておりましたら、やはり地域が持続可能な地域づくりでの危機感ですね。危機感から出発しているなど。上手く機能しておりました。まさに私共の地域も 10 月、後 2 週間すると、丹後一円祭りなのです。祭り一つとっても、若者がいない、人口減少で、伝統行事の継続が困難になって、間人では屋台という言い方しますが、これが各地域からなかなか従前のように上げることができなくて、二つで一つのように、実際そこまで追い込まれてきております。そういった意味からして、すごく危機感を持っておりまして、私は去年から区長をしておりまして、実は都市におられる方はなかなか理解できないと思いますが、区費というものがあまして、自治会ですね。自治会費で、私共は 7 つの集合体と一緒にしておりますが、28 団体あります。これを一本化しようと、これを区費の平準化をやろうと、まさに改革をしようと、改革ではなくて、革命だなど、バッシングを受けているのです。でもどうしても、地域持続可能な、次の世代にバトンタッチするには絶対にやらないといけないという点で、頂上が見えてきましたので、私たちが想定していたとおりにいくのかなと期待しているのですが、そういった意味では正に、先ほど申し上げました朝来の例はそうなのです。私のところは先進地でやっておりますが、先ほど宇川の例をあげました、宇川とか他の地域の区長様、その地域の皆様にとって、本当はそういった地域がやらないといけない、朝来の例みたいに、絶対やるべきで、できる。ただそのリーダーが、僕らの時にはしたくないとか、面倒だから先送りするとか、けど逆に言うと地域の危機感がないです。ある種面白い言い方して、私のところは区の事務所に囲碁サロンがあります。70

代 80 代の人が 7~8 人来てやっているのですが、私は色々と話をしていると、冗談で君が好きでやっているからいいじゃないと、好きでしている、でもある面で究極の言い方だなと思って、やはり好きじゃないとできないです。好きだということは地域を愛しているということで、言われている方は違った意味で言っているのですが、でもやはり好きじゃないと好きだったらできるのです。そう思っていて、この言葉がいいなと思っています。だからやれないということはそこまで危機感を持っていないし、やはり地域を愛していないね。本当に。だけど現状は放置出来る様な、先ほどの買物の話もそうですが、宇川地域だけではなくて、丹後町で取り組まざるをえないなど、私の町もにしがきから、一番両端と言ったら、600メートルくらい離れていて、この問題は、新川先生から言ったら、地域ごとに課題があるとおっしゃいましたが、実は京丹後市はほとんどありますよね、浅茂川もそうですし、あんな端からなかなかいけませんよ。だからそういった点から、私共は間人の診療所がありますが、端にありますので、患者様が急に送ってほしいというので、専属の運転手がいるのですが、会議中で、私に電話があったので、急遽私が行って来ました。実際に、なかなかお年寄りには歩いては帰れないです。だから宇川に限らずたぶん京丹後市一円がそういった状況でありますので、自治区で出来ることは結構あるので、私はやはり最後は人づくりで、地域に関わってくれる人をどうやって育成していくのか、区長が出来ることはたくさんあります。もうちょっと行政が規制を緩めてくれたら、本当にそう思います。

会 長： そこはもっと、どんと、この場ですから、出していただいて。

委 員： いや、それは私も市議員やっていたときより、区長のほうが執行権もっているし、一定予算もあるし、はるかにいいです。市議員は議決権ありますが、もの言うだけです。やっぱり区長のほうがね。

会 長： そこはもう少し緩和してもらったらやりやすいというのは、例えばどういうものが出てきますか。

委 員： いや、先ほど申し上げました、運転の問題もせめて病院まで弥栄病院とか中央病院まで来た時は、帰りも認めてほしい。ウーバーのシステムで、でも絶対良いとは言わないです。行政がいいと言わないと民間事業者がいいと言わない。

会 長： でも元々、中央のほうでの法的規制がかかってきますのでね。

委員：　　そうですが、実際やはり、そんな数千円もかかって、墓終い事で、舞鶴の人が間人まで来たのです。間人に墓地があって、私が区の事務所に言ったら、峰山タクシー様がタクシー待たせていて、タクシーで来ていて、墓終いの手続きで30分かかりますので、その間時間待ちタクシーだったので、タクシー帰しなさいと言いました。うちはウーバー呼ぶので。だから色々な面で規制がかかっていて、緩めてもらったら、住みやすい町に出来るのです。本当に具体例で。往復して1万円以上かかっております。タクシーで峰山駅からですと。壁になっております。

会長：　　本当にね。

委員：　　一言言わせてください。私の住んでいるところは弥栄町というのですが、弥栄の場合でもこういった組織図、29年に小規模多機能自治の視察に行って、色々検討していった中で、朝来も行ってきました。そしたらやはり校区単位でのスタートになっていたということはあるのですが、地区もあるのですよ、区もあって、そこが見えなかったのですが、弥栄町では区の体制をしっかりと強化して、校区できることは校区でしよう、こういった色々な共通の課題、持っている課題は一緒なのですが、協働できる課題は限られてきております。やはりそこはしっかりと選択して、校区で出来ることは校区でしまししょう。それから、全体で出来ることは弥栄町全体で取り組みましよう、そういった考え方で進めている中で、新コミュニティ事業が入ってきた、良い事業だなと、これが活用できないかなと置き換えられないかなという所で今模索している最中です。それで一つの例として、校区で取り組む中で、私のところが鳥取校区というのがあります。鳥取校区で避難所訓練、防災意識を高めるということで取り組んだのです。避難所という所が、弥栄小学校1箇所、3つの区が一つの校区になるのですが、鳥取校区になるので、そしたら避難所に行けば、言った人が全て、運営をするのだよという意識改革をしないといけない。そういったところで取り組むことによって、これはどうすると色々意見が出てきて、今2年目になって、新しい考え方という声が出てきているのが、女性の目線で避難所運営はしないといけないのではないかと、女性の中で話し合って、またマニュアル作りをして活かしまししょう、という取り組みをしております。その避難所運営をするためにも効率よくやっていくには、個々が色々な動き方を、隣組単位でやはり動こうと、そういった考え方

が出てきまして、ということは、地域の隣組の強化も図ろうと、やはり避難所に行くのも、隣組単位でいこうという、声をかけて危ないときには行こうという、そういった意識をしっかりと持とうということで動かしているわけです。まだまだ不安はあるのですが、区民全体が 500 世帯あるのです。だからこれも講師の先生とオンラインミーティングをしながら、どう進めていこうかということ、実は話し合いながらやっているのですが、やはり区民が 1 軒でも 1 人でも参加することによって、意識を持ってくれるのです。だから 600 人も居ないのですが、地域の構成が 1 つの隣組が 15 世帯あります。そしたら 1 世帯から 5 人ずつ、3 人に出てもらおうと、皆様の隣組が出てくれたら、住民参加型で、そういった避難所運営を考えようという取組みをすれば、機会があれば、また自分達に跳ね返って、自分達がするときには、事前準備に何をしないといけないのかと、色々な話が出てきております。女性の目線で何をしないといけないのかという、誰がスイッチを入れるのだとか、色々な考え方が、そういった事で進めようとしているのですが、私どもも、どの組織を、地域にあったものをどう作り上げていくのかということ、今から展開していくという形で進めております。地域の中には財産というのは、色々な技術者や能力を持った人が地域を構成しておりますので、そうした人が色々なところに出て行ってもらって、力を発揮してくれるというのが、地域づくりの基本だと思います。それが人材作りに繋がっていくだろうという思いを持ちながら、取り組もうとしております。だから、こうやって、今市が進めていただいているものをしっかりと受け止めて、地域でしっかりと話し合って作り上げていく、ということが大切です。社協様も入っていただきながらしていくことが必要だと思っております。

会長： ありがとうございます。本当におっしゃったことは、すでに新しいコミュニティの考え方に、進んできているということでもあります。これは誰がやるという問題は色々な地区であるのかもしれませんが、これは、こういった方向性に進んでいるということが見えてきます。どうでしょう。今の発言を受けてでも、市民の考えでも、この場で出来るだけ皆様に 1 回は発言いただきたいと思っております。

委員： では、区費の件ですが、うちはもうしたのです。色々な問題が出ましたが、区長が泥を被ってやるのだという形で進めて、言う

人は出てくると思いますが、それを待っていたら進められないので。

委員： 浅茂川の区費の資料を実はいただいたのです。勉強しました。ただ先ほどありましたが、別に何のために区費の平準化をするのか、区費の平準化をすることが目的ではなくて、実は持続可能な、自立した区にしたいということなのです。先ほどおっしゃった、今京丹後市の区から出る要望は2700個ほどありまして、毎年あるのです。だから私どもの地域も相当出すのです。でも行政ばかり出来ないのです。だからいくら市道の側溝であれ、ごく身近なものでも何年待ちますか、ひどいものだと、10年くらい待ちます。だけどやはりここに生活している、住民の皆様は困るわけで、それを実は区で直したいとっていて、だからそこで財源を作りたいとっていて、だからそういった意味で区費の平準化をしたい。そして他のところに行くと、京丹後の区長の役員は人件費が高すぎる。区費を集めて、相当使いすぎています。私はこの場で言っているのかわかりませんが、人口が1200ですから、間人の私のところの6割くらいの人数の区長さんに、年間報酬いくらもらっていますかと、ある視察した人に聞いたら、3万円くらい。行った区長も黙っていました。年間3万円です。ただしやはり私のところもそうですが、私は旗を振る挨拶要員です。やっぱり事務局です。事務局がしっかりとした人がおられて、その方が全部仕切っています。そして、行った所の区長様も75歳で、最後だということで、やはりそういった形で地域貢献という、区長はボランティアではない。ボランティアは他人事ですから、他人事をするのがボランティア、区長は自分達が住んでいる区であったり町であったりするのです、勘違いしている人がおりますが、そういった経緯で集めた区費をもっと有効に効率的に使うためには、人件費にも切り込まないといけないなと率直に思います。究極はやはりそこだと思います。やはり自立した区を作っていくというのが最終目的で、行政には頼っておられません。無理です。お願いすることはしないといけないのですが、そういった話をしていて、こんな市道の改修を区でやると損じゃないかと言っていて、それを損と捉えるのか、そうではなくて、ずっと5年10年我慢して、要望だしている、そっちのほうがおかしいのではないかという話をしていたのです。

委員： 区の色々な動きがありますので、区が動くことによって、周

りの区にも影響してきますので、やはりそういった広がりや、今後広がっていけばいいなと思っておりますので。

- 委員： 一番身近ですもんね。
- 会長： 行政としても、こういった問題は、現場が盛り上がってきているのに、意味があるのですよね。
- 委員： 今は溝の蓋一枚でも行政に直して欲しいと言ってますが、そんなわずかなものですから。区でしたら。大した問題ではない。意識の問題ですよね。意識改革がね。
- 委員： 意識改革ですよね。全部市がやってくれると思っている人が多いです。
- 委員： 市民は、みんなそう思っております。
- 委員： それを変えないとダメですね。
- 会長： わかります。我々学者もつい理論で言うてしまうのですが、結局は現場で、やむにやまれぬ思いがありますので、本当にリーダーがそこに居るのかということがね。
- 委員： 都市にお住まいの先生方はどうかと思いますが、昔は部役ということで、草刈などすべて部役で出てやっていました。それが生きている部分もあると思いますが、それが若干今になって規約になって、すべて行政がして、家の前に猫が車で跳ねられて死んでいても、取りに来いという、そういった時代になっておりますのでね。
- 会長： 自治の本質のようになってきましたね。これは非常に良いと思いますが、どうでしょうか。
- 委員： 僕が言うほどでもないと思うのですが、本当に区長様は、そういった事を考えておられてすごいと思っております。僕自身は、そこまで意識的にやっているというイメージがなかったので、すごく意識が高いと思います。僕が言うのもあれですが、僕は浜詰に住んでいるのですが、実家が木津の岡田という所ですが、区の役が結構あるのです。僕に兄がいるのですが、兄とこの前父親から世代が代わって、区長の話をしていたのですが、結構仕事もあって、日曜日に草刈とかあるので、そうなる結構しんどいと思うのですが、浜詰はそこまでないのです。区の役とか草刈もやってくれるので、年間浜掃除と溝上げだけ、それはありがたいなと思うのですが、やはりコミュニティとかそういった事が必要なと思う反面、忙しいなと思うこともあって、どちらがいいのか分かりませんが、感覚的にはないほうがありがたいです。日曜日に

半日出るなら、5千円くらい払いますけど、みたいな、1万円くらい払いますので、仕事させてくださいという、個人的にそんな感じですよ。

会長：それが人間の本質ですね。わかりました。いかがでしょうか。

委員：私は今のと同じ意見かもしれないのですが、私は鳥取校区なのですが、実際いないのです。自宅は朝仕事に出て、仕事して夜帰るだけで、うちは子どもも2人とも成人しておりますので、子供会とか婦人会もありませんし、小学校にも関係ないですし、そうすると地域に関わることがないのです。女性の意見も地域の区に反映させようということになったと思うのですが、また地区に戻すのかという思いがありまして、私たちは生活圏も広がりましたし、買物に行くのも、情報を得るのもどんどん外に広がっている中で、ネットワークも自分の住所のある地域だけでなく、分野的に広いところでネットワークも出来ていますし、それをまた地区の中で何か役割を持って動くのかという所をちょっとまだ自分の中でイメージできないのと、後は行政が本当に横のつながりを持って、しっかりとここにマッチするのか、言われるように誰がするのか、一つまた役が増えるだけじゃないのか、よほどきっちりとしないとそうなるなと思ったのと、あとは例えば先ほどの子どもの遊ぶ場所が欲しいですとか、では図書館をどうしようとか、こういったネットワークでは出てこない話題だと思うので、そういった広域の課題についても、しっかりと考えるような、そういった事も同時に必要だなと思いました。ちょっと今の協働コーディネーターというよりは、地区の一区民としてですが、全然行っていないので。

会長：白熱する議論で面白いですね。しかし地区にまた下ろすのかということより、逆に言えば今現在ももっと狭い行政単位、そこにやってきていることは限界があるという認識なのですね。そこから先の方法論はまた違うのではないのですかね。そこはどうか。

委員：もちろん小学校も合併しましたし、どんどん出来なくなってきたので、少し小学校区単位で、草刈にしても地蔵盆にしても、何かやるにしても、少し広い単位でやっていく、そういった意味では私は小規模多機能ではなくて、大規模多機能になっているなど、今よりも広がっているなどと思って、小規模多機能がずとんと落ちてこなかったのは、そういったところかなと思ってお

ります。確かにもう少し広い範囲でやらないと立ち行かなくなっているなど思っています。

会 長： わかりました。

委 員： こちらから課題を押し付けるのではなくて、やっぱりそこで共通できること、協力できることはなかなかやろうよと、校区でやろうよということを見つけて進めていくというのは、地域や校区でバラバラだと思います。基本的なものはあるにしても、取り組み方も違うし、それでいいのかなとっております。

会 長： いかがでしょうか。

委 員： 私も元々は丹後の人間ではなくて、引っ越してきたのですが、地域のことについて、こっちに来て16年くらい経つのですが、この地域のことをよく知っているのかというと、ご近所様の名前も出てこない方もいて、その辺りの繋がりが持っていない部分もあるかなと思っているのですが、横のつながりが弱いということは、繋がることをしていかれるのはすごく良いことだなと思って、似たようなことがあった時に、どこに声をかけたらいいいのかとか迷うこともあるので、すごく横のつながりをしっかり持っていただけると嬉しいなと思いました。

会 長： つながりはやはり必要になるだろうということですね。時間がかかり押しているのも、まとめて終わっていかないとと思っております。最後いかがですか。

委 員： はい。私一昨日は、小学校の親子清掃に参加しまして、小学校ってこんなに汚かったのだとか、そういった取り組みをしました。その前の週は、うちの下の子どもは、こども園に通ってしまして、こども園のバザーの手伝いをしまして、結構毎日忙しく過ごしているのですが、けれどもやはり地域の繋がりがその場で持てるということが、非常に新鮮でして、そういったものが例えば京丹後市でも地域の繋がりとして、やはり皆様お住まいで、お隣様がどなたか分かっているのも、新鮮さがないかもしれないのですが、私は逆に凄く新鮮なのです。そういった場に参加すること自体が。昨年度はマンション管理の理事会の理事長をしております、お住まいの方々の意見を聞いて、大変だなとか思っていました、やはり何かそういった事に踏み込んでやるという機会が大事だなと思いました。何が言いたいかと言いますと、色々な負担はあると思います、皆様お忙しいと思いますので、けれども何か関わる、参加するチャンスというのをぜひたくさん作っていただいて、それが校区のコミュニテ

ィに入るのか、小学校なのか、こども園なのか、色々なコミュニティがあって、クラブもあると思いますが、そういったところに入るチャンスがたくさん作っておいて、参加できるチャンスの中で、自分の能力だとか、色々な人脈を活かしてもらって、地域をより良くしていただくような機会を作っていただくと良いのかなと、すいません専門外ながら、思いました。

会 長： 参加するところが複数あって、その中でどこかに関わっていくという形のイメージですかね。ありがとうございます。本当に長くなりまして、でも白熱して本当に良い議論をいただいてありがたく思っております。最初の方から通してみているとどんな議論していたのだろうということですが、基本条例を見直していくという、このまちづくり委員会の趣旨に基づいてやってきたのですが、基本条例の参加とか協働とか、これが一定程度進んできていて、またこれを今後も進化させていただかないといけないということ、もちろん議論していくということと一致していると思います。それは住民自治という当たり前のことをどう進めていくのかということになってくるでしょうが、そこで浮かび上がってきた課題というのが、先ほど説明いただいたような、ネットワークがあるまちづくりをどう進めていくのか、コンパクト、かつネットワークのまちづくりをどう進めていくのかということも繋がっているのだと思います。なぜかという、コンパクトというのは、地域にしっかりと拠点を残していくということになりますし、ネットワークというのが、単に行政が箱物を作ることとは全く違って、交通なら交通、共通課題なら共通課題という所で横軸を通していく、それが人材の雇用を進めていく、そういった全体を通してのネットワークのイメージだと思います。そうした方向性をどのようにやっていくのだろうという時に、今日ある意味では新しい点が言われていたかもしれませんが、シェアの考え方というのは結構魅力的だなという点があったと思います。ただそれを進めていくためには、どのようにやっていくのだろうという時に、何をおいても、やはり現場間での課題をすくい上げていって、そこから動いていくようになっていかないと、何事も進まない。やはり中間支援団体というのは、必要だし後押しをしていくような行政の方向性もいるのだと思います。それからもう1点、話に出ていたことですが、ただボランティア、NPOだけでまわるのかということ、結局はビジネス的なものでまわっていかないと

続くことも続かないよということは当然あると思います。これは課題によって違ってくると思います。ですからここは、本当にNPOと例えば活用して行きながら、やっていく、ここは例えばビジネス的な観点でやっていったほうがいいのか切り上げていくことが大切かなと思います。これは出ていた論点ではないのですが、新川先生のアドバイスも受けてちょっと付け加えてまとめることになるのですが、ビジネス的なことも含めて考えていくときは、当然先生おっしゃったようにITの技術革新が進んできている中で、これらにどう取り組むのかということは大事なわけです。全国の自治体、似たような課題を抱えているところはたくさんあります。京丹後市だけじゃありません。どこも少子高齢化が進んでおります。ある意味、全国競争のわけですよ。そこでなぜ京丹後市か、なぜ京丹後市にビジネスならビジネスでそこに目を向けるのかということですが、その糸口をどう作るのか、例えばITにしてもMaaSにしてもそうなのですが、新川先生先ほどおっしゃったのですが、全自動運転がそこまで来ているといった時に、その技術が一旦広がって言ったら、どこの市も手を上げてしまうのです。それを進めてほしい。となるとその前にこちら側からどういった仕掛けをしておくのかということが大事だと思います。例えば、MaaSならMaaS、こうしたことに関して、例えば色々な企業に声かけをしながら、研究会を組織して行って、どのようなまちづくりでどのようなことが出来るのかということ、企業も市民も一緒になって、行政も入って、研究会を組織して、いざ始まったら、ビジネス会でも京丹後は準備してきたよという感覚を与えるのかということもいるのかなと思っております。これは冒頭でもありました、京丹後市をどう売り出していくのか、アピールしていくのかという観点にも繋がることかなと思います。そういった意味で一方での中間支援団体、他方でビジネスをどこかで見据えていきながら、もう少しで始まる全自動運転時代を見据えていきながら、仕掛けをどうしていくのか。それから、こうしたことと並んで、最後の論点にありました、新しいコミュニティですね。これは単なる中間支援団体とかビジネスではなくて、違う新しい住民自治の区割りのあり方になってくるのでしようが、これはある意味待ったなしで、限界集落、準限界集落がこれだけ増えてきている中で、やらざるをえないことがあると同時に、すでに進んでいることがたくさんあるということが今日確認できま

した。これは非常に大きなことです。これは行政にしても心強いことだろうと思いますので、そうしたすでに動いていることもきちんと取り込む形で新しいコミュニティを進めていくことになるかと思えます。ただ 1 点注意しないといけないのが、地区に仕事を戻していくということだけやるとたぶん、もともこもないだろうと思いますので、先ほど言った中間支援的なこと、地区割りではなくて地域割りではなくて、もっと幅広いネットワークになったらいいなということで、そうしたものと組み合わせることで、初めて全域が機能していくのだろうと、そういったわけを話に戻すと、コンパクト+ネットワークというのが見えている中で交通の問題、シェアの問題、共通課題をどう見つけていくのか、こういった事をどう進めていくのかという問題があり、これに対して中間支援、ビジネス連携、そして新しいコミュニティ、こうした 3 つのツールがあるのではないかということで、これを進めていく方法で参加協働をやっていくということになるのではないかなと思います。そういった事で、今日は長丁場になりましたが、一旦第 3 回の議論は閉めさせていただきます、次の会に結びつけていきたいと思っております。それでは、事務局に進行をお返しします。

総括監： はい。長時間に渡りまして、熱心にご議論いただきまして、ありがとうございます。本日は、未来のまちづくりのワークショップについてまた、持続可能な地域づくりの取組みについてということで、参考という形でこれを元に条例の改正等々も、先ほどありましたように、参加と協働という視点をどのようにしたらそれが実現できていくのかなという辺りを踏まえてお考えをいただけたらと思っておりますし、また今日いただいたご意見等につきましても、また次回もあると思えますが、先生方からありましたように、それがこの後どうなるのかという辺りの説明責任は、当然市にもあると思っておりますので、昨年やったまちづくりワークショップ、それから今日というか今年の議論も含めまして、一つのきっかけというか、そういった辺りで、我々もこの皆様のご意見を使わせていただくというか、検討の基礎にさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。それでは次回の委員会の日程について事務局からご説明させていただきます。

事務局： (日程案内)

総括監： はい。それでは以上持ちまして、本日のまちづくり委員会を終了したいと思います。閉会に当たりまして、川戸職務代理からご挨拶をお願いいたします。

職務代理： 皆様色々と多くの貴重なご意見をいただきありがとうございます。やはり計画を立てること、当たり前のことと思います。その計画を実現するためには、何をするのかということとしっかりと議論していく必要があると思います。一つの例を挙げますと、公園にたくさん草が生えている。市の管理をする公園ですので、市の職員に早く刈ってほしいという人もいれば、同じ公園を見に言っても、たくさん草が生えていたと、草刈機を持って刈ってもいいかという、そういった人もおります。だからそういったところで、やはり意識改革が必要だと思えます。まずは、やはり市の職員が全てやってくれるという考えを持っている人も多いので、やはりそういったところを市がやるべき事、地域がやるべき事、個々がやるべき事をしっかりとやはり確認することが最初だと思います。こうして話し合うことの楽しさを私自身感じております。今後も皆様の意見をいただいて進めていこうと思えます。今日は本当にお疲れ様でした。

総括監： ありがとうございます。皆様、大変お疲れ様でした。どうぞお気を付けてお帰りください。